

研修会プログラム概要

1. キャリアカウンセリング入門

原 恵子（筑波大学）

職業生活の長期化や価値観の多様化が進む中、個人にとって望ましい職業選択や自律的なキャリア形成を考えることは、重要なテーマとなっています。本講座では、「キャリア」という概念の持つ意味や、キャリアカウンセリングに関する社会的意義や取り組み、基礎理論や必要な技能など入門的な内容を紹介します。キャリア支援者としての職業的な発達についても、共に考えたいと思います。

2. ほんものの傾聴を学ぶ：ロジャーズに学び直す

諸富祥彦（明治大学）

この講座では、「クライアント理解を目的とする一般的な傾聴」と区別される「傾聴それ自体の中に、変容につながる力を持つ傾聴」、ロジャーズのパーソンセンタード・カウンセリングの傾聴を学びます。単なる基礎としての傾聴ではなく、深く内側を聴いてもらうことで、クライアント自身の内的な体験が活性化され変容が進んでいく傾聴の極意をロジャーズの著作に立ち返って学んでいきます。私の実際の面接の一部もごらんいただけたらと思います。

3. EAMA（自己探究カウンセリング）グループ ロジャーズをもとにした統合的アプローチ

諸富祥彦（明治大学）

EAMA（体験—アウェアネス—意味—生成アプローチ）は、カール・ロジャーズの理論と実践をもとに諸富が発展的に創造・開発した統合的アプローチです。ロジャーズはセラピーの本質を「体験を体験すること」にあると考えました。こうした志向性において諸富がこれまで学んできた学びを統合し、新たなセラピーの型を見出しました。一人一人が自分の人生を「じゅうぶんに生ききる」ことを目指す、とても楽しくてエキサイティングなアプローチです。セッションの実際を見ていただきます。

4. 動機づけ面接

沢宮容子（筑波大学）

動機づけ面接（Motivational Interviewing, 以下MI）とは、協働的なスタイルの会話によって、相談者自身が変わるための動機づけを高め、行動変容を促す方法です。MIは、あつという間に相手が変わるといような魔法の杖ではありません。相談者の言葉からささやかな行動変容への糸口を見つけ、それを少しずつ広げたり深めたりしていく協働作業です。あなたのカウンセリングの工具箱に、面接の実践知の一つとして加えてみてはいかがでしょうか。

5. 認知行動療法の代表技法：シェイピングでの行動形成

中村恵子（東北福祉大学）

シェイピングは、スキナーが開発した行動形成技法です。行動療法では①先行刺激、②行動、③結果という三項随伴性を構造化した機能分析によって、行動を強化している機能をとらえます。そして、目標行動の形成プロセスを課題分析によって可視化し、スモールステップで低次から順送りに強化して行動形成を図ります。本講座では、不登校の事例を用いて機能分析と課題分析を詳細検討し、シェイピング法の実践プログラムを解説します。

6. 生物心理社会モデルのケースフォーミュレーション

中村恵子（東北福祉大学）

ケースフォーミュレーションとは、クライアントの問題がどのようなメカニズムで発生・維持されているのかについて、支援者が情報を整理しながら行う定式化で、そのマトリックスが埋められるように面接での質問が振り出されます。認知行動療法ではアセスメントに並行して作成され、その精査から支援方針を導きます。本講座では、Campbell & Rohrbaugh(2006)が1シート12コマのマトリックスに集約したBiopsychosocial Formulationモデルとその活用方法を紹介します。

7. コンパッション・フォーカスト・セラピー 基礎編

石村郁夫（東京成徳大学）

コンパッション・フォーカスト・セラピーの基礎理論について詳しく解説します。コンパッションの定義からはじまり、どうして人が苦悩を抱えるのか、どうしてコンパッションが大事になるのか、など最新の脳神経科学に関して触れます。簡単なコンパッションのエクササイズを体験することにより、カウンセリングに臨む際に大事になるカウンセラーの姿勢を考えます。

8. コンパッション・フォーカスト・セラピー 応用編

石村郁夫（東京成徳大学）

コンパッション・フォーカスト・セラピーはさまざまな心理教育やエクササイズを体験することでクライアントが苦悩に向き合うことを支援していきます。しかし、目を背けたくなるのも事実です。こうしたクライアントに生じる抵抗について理解します。このコンパッションの阻害要因を恐れ (Fear)、ブロック (Block)、抵抗 (Resistance) の三つの頭文字をとってFBRsといいます。このFBRsに関して理解を深め、どのように取り扱っていけばいいのか検討します。

9. 箱庭療法 理論篇

渡部純夫・内藤裕子（東北福祉大学）

箱庭療法の発展の歴史やベースとなる理論, 治療的な意味, 実施方法や実施する際の留意点, そして作品の見方など, 基本的なことを学びます。

10. 箱庭療法 実践篇

渡部純夫・内藤裕子（東北福祉大学）

2人の講師が, 発達過程において箱庭に表現されることが多いテーマをあらかじめ選び, 見守られる中で実際に作品を作ります。次に作品や表現過程について2人が質疑応答を交わしながら振り返ります。単なる作品としてではなく表現の過程を見ること, そして, 制作者と見守る人の体験の共有から, 箱庭療法の実際や治療的意味の理解が深まればと思います。

11. ジェンダーの視点を活かすカウンセリング

布柴靖枝（文教大学）

「人生100年時代」を迎え, 「結婚すれば生涯, 経済的安定が約束されるという価値観で女の子を育てることのリスク」が内閣府の「女性の骨太の方針」の中に明記されました。VUCA時代にあって私たちは, 昭和モデルを脱して, いかに多様な生き方を包摂することができるかが問われるようになってきています。本講座では, 国内外の動向を示しつつ, ジェンダー平等の考え方, ジェンダーを基に生じる暴力(DV, 性暴力等)やLGBTQ, そして, 私たちの中に刷り込まれている「アンコンシャス・バイアス(無意識の偏見)」についても触れつつ, ジェンダーの視点を活かしたカウンセリングについて考えていきたいと思います。

12. 「感情労働」を正しく知る！—対人支援と自分のしごと, 双方に活かす感情労働の捉え方—

関谷大輝（東京成徳大学）

感情労働は「自身の感情を仕事のためにコントロールする職業」を指し, 対人的な職業はほぼ全てこの特徴を持ちます。「感情を切り売りする」ともいわれる感情労働は, しばしば悪者だと誤解されますが, 本当は別の“優しい”顔も持つ存在です。本研修では, 感情労働理論の特徴や面白さ, 関連する視点等々を包括的にご紹介し, 感情労働の“正しい”知識を対人支援や自分のしごとに活かしていく道筋を考える時間にしたいと思います。

13. WISC-V 理論篇

小林 玄（東京学芸大学）

教育相談等の現場でよく活用されている児童版ウェクスラー式知能検査である日本版 WISC の第 5 版が 2022 年に刊行されました。近年用いられてきた第 4 版である WISC-IV と比較して、より多角的な観点から子どもの認知特性を把握できる構成になっています。また、理論的根拠についても強化され、指標の区分が整理されました。今後、知的能力のアセスメントの有力なツールとなる WISC-V についての基礎知識を、WISC-IV との変更点にも言及しながらお伝えいたします。

14. WISC-V 実践篇

小林 玄（東京学芸大学）

実践編では、理論編でご説明した内容について、具体的な事例を通して理解を深めていきます。まず、解釈の第一歩となる全般的知能水準を押さえた後、認知特性の理解の中心となる主要指標の得点から、子どもの知的能力の 5 つの領域について水準（知的能力のレベル）と特性（どのような強みと弱みがあるか、領域間のバランスがどのようなものか）についてアセスメントします。また、主要指標のほか、補助指標やプロセス分析、検査中の観察所見から得られた情報の活用についても言及いたします。

15. KABC-II 理論篇

三浦光哉（山形大学）

KABC-II は、WISC-IV・WISC-V と並んで、知能や認知特性の検査として、近年、特に教育現場で活用されています。KABC-II の特徴は、子供の知的能力を認知処理過程と知識・技能の習得度の両面から評価し、得意な認知処理様式を見つけ、それを子供の指導・教育に活かすことを目的としています。特に、習得尺度では、「読み・書き・算数」といった学習障害の鑑別判断に役立ちます。本講座では、KABC-II の下位検査の特徴、理論的背景、検査結果の解釈の仕方について解説します。

16. KABC-II 実践篇

三浦光哉（山形大学）

本講座では、「KABC-II の理論」を受けて、実際に KABC-II 検査を実施した用紙（結果）を見ながら、その読み取り（解釈）をします。その中で、「認知と習得はどの程度か」「どのような認知特性（得意・不得意）があるのか」「解釈したことを実際の教育（指導）の中で具体的にどのように活かすか」などについて実技を通して学びます。また、同時に WISC-IV のクロスバッテリー解釈もします。

17. 発達障害の子どもに対する通級指導での神経行動教育学的介入

坂本條樹（共立女子大学）

外界の情報（刺激）を受容し処理を行う一連の過程としての認知機能は、自覚し得ない中枢神経系の処理過程であり、ヒトの行動表出に影響を与えます。近年、発達障害児の認知機能を高めることで、学校適応の改善につながる研究も蓄積されつつあります。発達障害児に対する認知機能訓練とその効果を紹介し、子どもへの認知トレーニングを通じた発達促進的支援を紹介します。

18. 発達障害とデザイン

三谷聖也（東北福祉大学）

発達障害児者の生きにくさは、人とデザインの不一致に由来します。発達障害児者はユニークな適応の努力で対処しようとします。あまりにユニークなのでそれが周囲から問題と見なされてしまうこともあります。周囲者もまた発達障害児者を変えようと試みますが大抵うまくいきません。人とデザインに不一致が生じ「人」を変えることに困難が伴うならば、「デザイン」を変えるというオルタナティブな支援法があるのです。本研修ではDSM-5に基づく関数モデルを紹介し、デザインによる支援を一緒に考えます。

19. 大規模自然災害において被災者を支援するということ（基礎編）

—初期支援の基本のキ—

狐塚貴博（名古屋大学）・若島孔文（東北大学）

災害大国といわれる日本において、大規模自然災害の被災者に対する心理・社会的支援のあり方に関する本格的な議論が展開したのは、概ね四半世紀前からと短い。しかし、この間に主要なガイドラインや知見が紹介され、また多くの実践的な知の蓄積がみられます。本研修では、災害支援の主要なガイドラインの要点や論点を概観した上で、災害支援に必要不可欠なエッセンスを抽出します。その上で、東日本大震災における支援活動を例に、基本的な被災者への関わりのコツを提供します。

20. 大規模自然災害において被災者を支援するということ

若島孔文（東北大学）・狐塚貴博（名古屋大学）

本研修では、大規模自然災害において、どのように被災者を支援するのか、という問いに対して、ブリーフセラピーの観点から実践例を交えて説明します。主に東日本大震災における心理・社会的支援活動から導いた、ブリーフセラピーに基づくスリー・ステップス・モデルの紹介と適用のコツを提供します。このモデルは、被災者の自己治癒力や資源（リソース）に着目し、無理なく否定的な体験と回避の悪循環を断つことを手助けします。また、被災者との心理面接を行う上でのミニマルなポイントを示しているため、適用可能性が高いモデルです。